

## 「五本の指」のかたちをのこす「てへん」

「手」は西周代の金文①にみられます。

「五本の指を開いた〈てのひら〉のかたちをえがいた字」です。

中指だけが、上にのびたかたちをしていて、下は手首です。

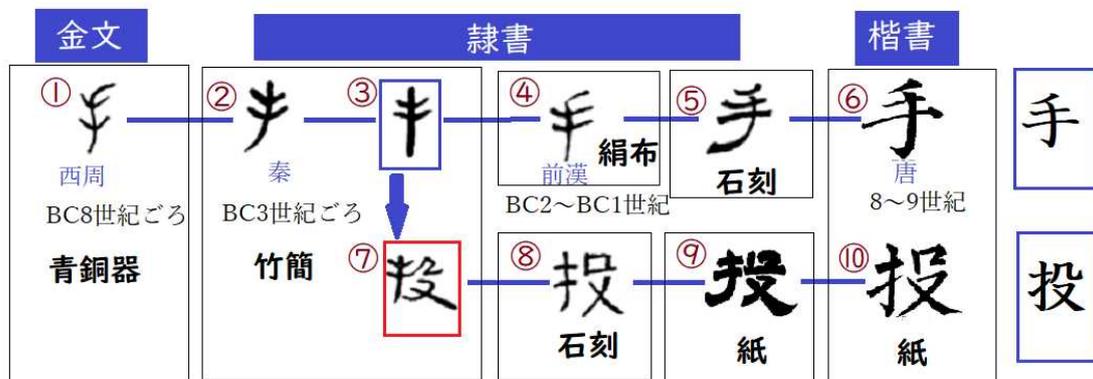
秦代の隷書②になっても、字体はひきつがれました。

そして前漢代の隷書④までは「五本の指」のかたちが維持されます。

⑤あたりの隷書で、中指をあらわす部分が独立します。

そして⑥の楷書で1画めが「短い左はらい」となります。2画めと3画めが「横画」、そして4画めが「たて画とはね」となります。

こうした字体の変転から、楷書では「五本の指」のかたちが、わからなくなりました。



### 「てへん」の登場

逆に「てへん」は、「五本の指」のかたちが、いまでも残っています。

「てへん」は秦代の隷書⑦に登場します。

もとになったのは、秦代にあらわれた「手」の略体③でした。

そして⑦では、へんの位置にくるので、③の字体を細くしました。

漢代の隷書⑧は、ほぼ秦代の隷書の字体を維持しています。

そして楷書⑩もそれをうけつぎました。

ですから楷書の「てへん」は、「手」のもともとの字体①②③があらわす「五本の指」のかたちを、いまでも維持しているとみることができます。

なお、隷書から楷書にうつる過程で「手」⑤のように、たて画の書き終わりをまげる傾向がでてきました。それにしたがって、てへんも、たて画の書き終わり（手首部分）を⑨のように、まげて書くようになりました。

そして楷書のてへん⑩は、横画を二本続けて書くのではなく、1画めの「横画」のあと、2画めを「たて画とはね」、さらに3画めは「右上がりの横画」となりました。

一般に横画二本とたて画の組み合わせは、「キ」「干」「半」「手」のように横画から書くのですが、「てへん」は、たて画の書き終わりをはねていることから、楷書では自然といまの筆順になったとみられます。結果として「手」と筆順がちがうことになりました。